

イラン人質危機と元テキサス州知事の暗躍



国際政治学者 高橋 和夫

[元テキサス州副知事の告白]

4月末、現職のジョー・バイデン大統領が再選への出馬を正式に表明した。これで来年11月のアメリカ大統領選挙に、さらに注目が集まり始めた。まだ1年半も前に、である。

ところが、もう一つの大統領選挙にも注目が集まっている。それは既に43年前に過ぎ去った1980年の大統領選挙だ。なぜか。それは、元テキサス州副知事のベン・バーンズの驚くべき告白が、去る3月18日の『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載されたからである。

それは以下のような内容である。1980年の大統領選挙前に元テキサス州知事のジョン・コナリーに誘われて中東を歴訪した。その際に、コナリーが各国のリーダーに次のようなメッセージのイラン革命政権への伝達を依頼した。そのメッセージは、アメリカ大統領選挙が終わるまで人質を解放しないように。そして、選挙後に成立するだろう共和党のレーガン政権の方が当時の民主党の現職の大統領ジミー・カーターよりは、イランに有利な条件を提示するからという内容だった。つまり共和党陣営に有利になるように、アメリカ人の解放を遅らせようとイランに働きかけたわけだ。



ケネディ大統領夫妻の前に座り手を振るコナリー知事。1963年、この後の狙撃で大統領は射殺され知事は負傷する。

出所：<https://edition.cnn.com/2022/12/15/politics/jfk-assassination-documents/index.html>

[敵意の原点]

この人質の問題とは何か。それを振り返りつつ、この告白の意味を考えたい。

アメリカ人の多くが抱くイランに対する敵意の原点は、テヘランのアメリカ大使館人質事件にある。この事件は、1979年11月から1981年1月まで続いた。この事件の背景を語ろう。

1979年のイラン革命で王制が倒れるまでは、イランは、アメリカの友人であり、その中東政策の要だった。ペルシア語でシャーと呼ばれたイラン国王は、1973年のアラブ石油禁輸の際には「石油と政治をミックスしない」

と語って石油を売り続けた。イランは、イスラム教徒が多数派の国ながら民族的な多数派はペルシア人である。アラブ人でない。それもあってイランは、アラブ諸国のイスラエルへの敵意を共有していなかったからだ。アラブ禁輸下でのイランによる石油輸出の継続は輸入国にはありがたかった。ただ、この時期にイランなどが、石油の価格を4倍に引き上げたのは、あまり歓迎できなかったが。

またイランは、アメリカが支えるイスラエルの友好国だった。両国は、軍事面や諜報面での協力を含め密接な関係を維持していた。さらにイランは、ソ連のペルシア湾への南下を阻止する強大なブロックだった。いずれの面を見てもアメリカの中東政策を支える強力な同盟者だった。カーター大統領の言葉を借りれば、激動の中東における「安定の島」だった。

ところが、そのイランが1978年から革命状況に陥り国王は亡命を余儀なくされた。そして入れ替わるように亡命先から帰国した宗教指導者アヤトラ・ホメイニの指導下で革命政権が樹立された。そして安定の島が中東全体を揺さぶる震源地となった。

米ソ冷戦が厳しかった時代だったので、ワシントンは、この革命政権がソ連の影響下に陥るのを懸念した。アメリカは、この新しい政権との関係の構築に努めた。イスラムという宗教を掲げる体制であるので、イランの革命政権が、無神論の共産主義の超大国ソ連に傾くとは限らない。アメリカは外交の余地があると見ていた。そこでワシントンはイランの首都テヘランのアメリカ大使館を維持して革命政権との接触を続けていた。ところが、関係を阻害する問題があった。

それは、亡命した元国王の落ち着き先だった。革命政権との関係悪化を懸念してシャーを受け入れようという国は多くなかった。エジプト、バハマ、メキシコなどを国王は点々

筆者紹介

福岡県北九州市生まれ。

大阪外国語大学外国語学部ペルシア語科卒

アメリカ合衆国コロンビア大学国際関係論修士

クウェート大学客員研究員、放送大学教員などを経て2018年より一般社団法人先端技術安全保障研究所会長

[主な著書]

『イランとアメリカ』（朝日新聞出版、2013年）

『イスラム国の野望』（幻冬舎、2015年）

『中東から世界が崩れる』（NHK出版、2016年）

『中東の政治』（放送大学教育振興会、2020年）

『ロシア・ウクライナ戦争の周辺』（GIEST、2023年）

[ブログなど]

<http://ameblo.jp/t-kazuo>

<https://twitter.com/kazuotakahashi>

https://www.youtube.com/channel/UC_hrS1_2UphGpix5y0T1lQQ

<https://news.yahoo.co.jp/byline/takahashikazuo>

とした。しかし、こうした発展途上国では対応できない問題をシャーは抱えていた。それは国王がガンに苦しんでいたからだ。その治療のために国王は医療の進んだアメリカへの入国を希望した。

しかし、それがイランの革命政権との関係を悪化させるのを当時のカーター政権は懸念した。しかもシャーの受け入れが、テヘランのアメリカ大使館員の安全を脅かすとの意見もあった。だが、「かつての盟友を見捨てるのか」との強い圧力が各方面から同政権にかけられた。そして人道的な配慮からアメリカはシャーを受け入れた。

[スパイの巣窟（そうくつ）]

だが、多くのイラン人の目には、これが素直に病気治療のためとは見えなかった。アメリカが国王を使って反革命の陰謀を企んでいる。そうした反応であった。その陰謀を阻止するために暴徒化した学生たちがテヘランのアメリカ大使館に突入して館員を人質にしまった。

暴徒が大使館に突入したのは、実は初めてではなかった。既に、そうした事件が革命後に起こっていた。革命後の初代の首相となったメフディー・バーザルガンは、その際には、すぐに当局者を派遣し暴徒を排除した。ところが、今回は違っていた。というのは革命の指導者のホメイニが学生の行動に「理解」を示したからである。これを受けてバーザルガン首相は辞任した。また学生たちの大使館占拠が続いた。

なぜ学生たちは、大使館占拠という暴挙に走ったのだろうか。そして、なぜホメイニは学生たちに理解を示したのだろうか。まず占拠の動機から説明しよう。

イランには、かつて民主的に選ばれたモハマッド・モサデクという首相がいた。同首相は1951年にイランの石油生産を支配していたイギリスの石油資本を国有化した。イランでは大変に人気のある政策だった。

しかし、1953年にアメリカやイギリスの諜報機関がイランでクーデターを起こしてモサデクを失脚させた。その際に作戦本部の役割を果たしたのがテヘランのアメリカ大使館だった。その後、アメリカやイギリスはシャーを操って石油産業の国有化を骨抜きにしてイランを支配した。これが、少なくとも革命派の認識だった。アメリカ人のイランに対する敵意の原点が1979年に始まった人質事件であるとする、イラン人のアメリカに対する憎しみの原点は1953年のクーデターにある。アメリカ・イラン関係は難しい。なぜならば双方が被害者意識を抱えているからである。

さて1953年のクーデターの記憶ゆえに、シャーがアメリカに入国すると再び陰謀が企てられていると多くのイラン人が考えた。そして一部の学生たちが、陰謀の拠点となるであろう「スパイの巣窟」のアメリカ大使館を占拠して、反革命の動きを事前に阻止しようとした。これが大使館人質事件を引き起こした学生たちの動機だった。

[新憲法の批准]

それでは、なぜホメイニは、この暴挙に理解を示したのであろうか。革命後のイランで展開されていた憲法の制定をめぐる対立が、その理解のヒントとなるだろう。王制を倒した後のイランでは、革命に関与した諸勢力の間で、どのような憲法を制定すべきかで激しい対立があった。ホメイニに従う宗教勢力は、最高指導者ホメイニに非常に強い権限を与える憲法を起草し、その国民投票による批准を目指していた。そのためには、アメリカとの危機を煽り、その危機感の中で、革命運動の象徴的存在となり、人々を反シャー運動へと動員したホメイニというカリスマ的指導者の求心力を、さらに強めるのが有利である。ホメイニ自身は、そう判断したのでだろう。そうした読みから、ホメイニは大使館の事件が引き起こした危機を解決しなかったのだらう。そして、この事件が発生した翌月の1979年12月に、最高指導者に権限を集中した憲法が国民投票で批准された。つまり、この危機とイランの国内政治が密接に絡んでいた。

[大統領選挙]

同時に事件は、アメリカの国内政治にも影響を及ぼした。というのは事件の発生が1979年11月であり、ちょうど1980年11月の大統領選挙の1年前だったからだ。選挙キャンペーンと平行して人質危機が進行した。現職のカーター大統領は、選挙戦では苦戦を強いられていた。まず1979年2月の革命で同盟国とも呼べる存在のイランを失った。また同年末にはソ連軍がアフガニスタンに介入した。カーターの安全保障政策の弱さが、こうしたアメリカの影響力の後退を招いた、と共和党の対立候補のロナルド・レーガンは容赦なく批判を浴びせかけた。

しかも、革命の混乱によって一時的ながらイランの石油輸出が止まった。これが石油価格を倍増させて物価と失業率を上昇させた。アメリカの経済は、インフレと不況が同時に起こるスタグフレーションであえいでいた。その上にイランでの人質危機である。カーター政権は八方塞がりだった。レーガン候補の優勢は覆い難かった。

[オクトーバー・サプライズ (10月の驚き)]

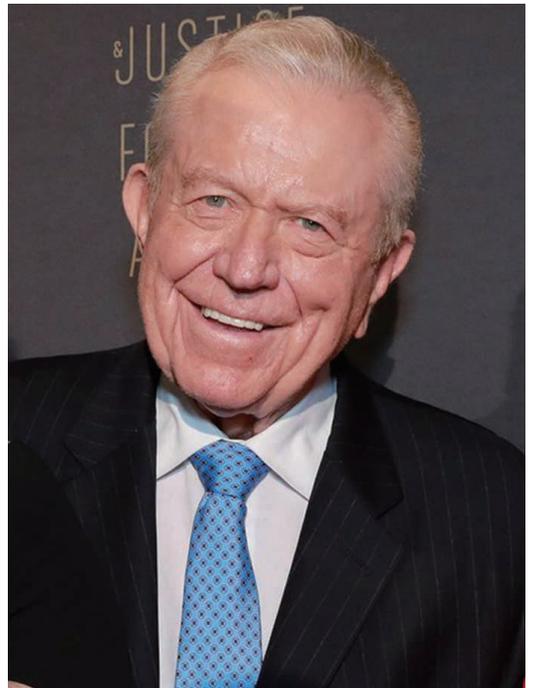
優勢の内に選挙キャンペーンを展開していたレーガン陣営が心配していたのは、1980年11月の投票の直前の10月の展開だった。ここでカーター陣営を有利にする大きな事件が起こるのではと懸念していた。具体的には、人質になっているテヘランのアメリカ大使館員の解放だった。もし、それが実現すれば、カーター大統領の人气が、たとえ一時的にしろ選挙前に急上昇するだろう。これが「オクトーバー・サプライズ」と呼ばれたシナリオだった。

だが、人質の解放交渉が結実する前に大統領選挙の投票が行われレーガンが圧勝した。

アメリカが凍結していたイラン資産と交換に人質を解放する交渉がまとまったのは、大統領選挙後だった。そして、実際に人質が解放されたのは、翌1981年1月だった。それもカーター大統領の任期切れ直後だった。イラン側は、最後の最後までカーターという人物を侮蔑した。

筆者の解釈は、イランの革命勢力はカーターという人物の人権問題での二重基準が我慢ならなかったのだろう。というのは、カーターは、大統領に就任すると声高らかに人権問題の重要性を謳（うた）ってソ連圏での人権抑圧を批判した。だが自身が安定の島と呼んだイランでは、秘密警察が王制の批判者を抑圧し逮捕し拷問していた。この点に関しては、カーターは寡黙だった。

いずれにしろ、経済状況もあって、そもそも不利だったカーターの二期目への野心は、イランでの大使館人質事件によって止めを刺された。こうして444日間にわたって続いたドラマが終わった。アメリカ人の意識に深い反イラン感情を焼き付けた事件だった。



ベン・バーズ、元テキサス州副知事
出所：[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ben_Barnes_\(48996884291\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ben_Barnes_(48996884291).jpg)

【元大統領】

この選挙での敗退によって、カーターは正直だが余り有能ではなかった大統領との評価を受けることとなった。

そもそも1976年の大統領選挙に立候補した際のカーターは、無名の元ジョージア州知事だった。だが、その無名さが、ベトナム戦争やニクソンのウォーターゲート・スキャンダルに疲れたアメリカ人には、新鮮だった。有能だが汚い手を使うニクソンの対極に位置していたのが、カーターの無垢な正直さだった。カーターは、現職のジェラルド・フォードを破って大統領に当選した。

フォードは、スキャンダルでニクソンが辞任したので、横滑りで副大統領から大統領になった。棚からボタ餅で大統領に昇格したので、その政治力は弱かった。選挙ではなく、ニクソンに選ばれた人物である。この年の共和党の指名争いでは、現職の大統領ながら、レーガン候補の急追を受けて苦戦したほどだった。そのレーガンが4年後の1980年にカーターに挑み当選した。

落選後のカーターは、元大統領として国際的な選挙監視活動や人道活動で活躍し、次第に再び人々の尊敬を集めるようになった。大統領を経験せずに、最初から元大統領となっ

ていたら、よかったのにとの厳しい揶揄はあったが。

[コナリー元テキサス州知事の動き]

話を選挙直後に戻すと、敗れたカーター大統領の周辺では、イラン人質事件が長引いたのは、長引かせる方が有利だと思った勢力がイランに働きかけたのではないかとの疑惑が抱かれていた。つまり共和党が、フェアではない手段に訴えたのだとの疑惑である。

具体的にはカーター時代にホワイトハウスでイランを担当していた補佐官のゲーリー・シックが、そのひとりだった。疑惑をかけられたのは、レーガンの副大統領を8年間つとめたジョージ・ブッシュ副大統領だった。この人物は、1989年に大統領になり、1991年の湾岸戦争を戦った。イラク戦争を始めたジョージ・ブッシュ大統領の父親である。

そして徹底した調査が行われた。だがブッシュがイランと接触したという証拠は出てこなかった。この件は、ある意味では、そうした陰謀はなかったという事で落ち着いたかに見えた。シックの抱いた疑惑は被害妄想だった。はずだった。

ところが、冒頭のようなバーンズ元副知事の告白があった。バーンズによれば、少なくともコナリー元知事は選挙のために自国民の人質の解放を遅らせようとした。そして、コナリーから報告を受けたレーガン陣営の選挙参謀のケーシーは、それを知っていた。

このコナリーという人物は、なかなかドラマのある人生を歩んでいる。民主党から立候補してテキサス州の知事に当選している。そして、1963年11月にテキサスを訪れていたジョン・ケネディ大統領夫妻と共にオープン・カーでダラス市をパレードした。その時に大統領は狙撃されて死亡した。大統領夫妻の前の席に座っていたコナリーも負傷した。

傷の癒えたコナリーは、その後に関東に移り、1980年の大統領選挙では同党の指名を求めた。しかしレーガンに敗れた。大統領選から撤退後にコナリーは、レーガンを支持に転向した。そして、国務長官や国防長官のような重要なポストを狙っていた。コナリーはニクソン政権下で既に財務長官を経験している。1971年末のスミソニアン合意で1ドル360円の時代に終止符を打った男である。

コナリーは、国務長官や国防長官にふさわしい知識と経験を有しているとの箔（はく）を付けるために、その夏に中東諸国を歴訪するのだとバーンズは考え、元知事に随行した。バーンズもテキサス州の副知事を務めた大物政治家である。二人は親しかった。

そしてバーンズも、やはり民主党から共和党へ鞍替えした政治家である。伝統的に民主党は南部で強かった。南北戦争で北部を率いて勝利を収めアメリカ合衆国の統一を維持して奴隷解放を実施したアブラハム・リンカーンは共和党の大統領だった。

したがって南部では人種差別に批判的な共和党、そうした現状を容認する民主党という構図さえあった。だが1960年代の民主党はリンドン・ジョンソン大統領の指導下で黒人に選挙権を与える公民権法を成立させた。これに反発して南部の白人たちの多くが、有権者



四人の元大統領，左からニクソン，レーガン，フォード，カーター

出所：<https://washingtonmonthly.com/2021/11/07/the-surprising-greatness-of-jimmy-carter/>

も政治家も，民主党から，共和党へと党籍を移した。コナリーとバーンズは，その典型例だった。

さてバーンズは，歴訪の過程でコナリーの目的が単なる中東外交に詳しい大物という箔付けではないのに気が付いた。コナリーは，人質解放を遅らせるために動いているのだと。帰国後，コナリーはレーガン陣営の選挙参謀のウィリアム・ケーシーに会っている。レーガン当選後は同政権でCIAの長官を務めた人物である。

このコナリーの暗躍を大統領候補のレーガンや副大統領候補のブッシュが知っていたかどうかは不明である。コナリー，ケーシー，ブッシュ，レーガンの四人は，いずれも故人である。

また，コナリーのメッセージがイラン側に届いたかどうか不明である。届いたとしても，それがイランの交渉姿勢に影響を与えたかどうか，これもまた不明である。レーガン陣営が人質の解放を1980年11月の大統領選挙の投票日以降に遅らせたかのように，ホメイニの側にも計算があったのではないか。事件の起こった翌月の12月の新憲法を批准する国民投票が終わるまでは，そして，その後も人質を押さえたままで，対外緊張を煽り続ける方が得策だとの読みがあった，との推測も十分に説得力があるだろう。

そのホメイニも，その弟子で側近として大統領としてイランの政界に君臨したハシェミ・ラフサンジャニーも帰らぬ人となっている。

メッセージがイランに届いたのか。影響があったのか。全く不明である。ただ，ある時期からイランの交渉での立場が強硬になったとの見方も存在するようだ。またレーガン政権発足後に，イスラエル経由でアメリカ製兵器や，その交換部品がイランに渡されたのも事実である。

当時のイランは、イラクと戦争中だった。イラン軍の装備は基本的には王制時代に輸入したアメリカ製だった。イランは、その交換部品を必要としていた。またイラク軍の戦車部隊を攻撃する対戦車ミサイルを求めている。

これは、後に発覚するイラン・コントラ・ゲートの中での取引として、これまで理解されてきた。つまりレバノンで人質になっていたアメリカ人の解放のためにイランが努力する。その見返りにアメリカはイランに対戦車ミサイルなどの兵器を売却する。その代金でアメリカは当時ニカラグアで共産政権と戦っていたコントラと呼ばれた反政府勢力を支援するという内容だった。全く議会には通報せずに、ホワイトハウスのレーガン大統領の周辺が実行した秘密の取引だった。この事件は後に発覚して、関与したレーガン大統領の顧問たちは、有罪判決を受けた。だが、「全ての責任を取る」と発言した大統領自身は大した政治的打撃を受けなかった。

イランへの武器輸出は、このコントラ・ゲートの一環として理解されてきた。しかし、もしかしたら、それはアリバイであって、実は人質解放をイランが遅らせてレーガンの当選を助けた見返りだったのではないかとの疑惑が湧いて来る。

[意識のある内に]

実は、バーンズが、この件に関して口を開くのは初めてではない。既に研究者に語っている。だが、その発言を反映した研究書は世の注目を集めることはなかった。バーンズは、それで改めてニューヨーク・タイムズという有力紙に告白した。その意図は何だろうか。

その前に、このバーンズ発言は信頼できるのだろうか。人生の晩年になって自分の属した政党が陰謀を企んだというストーリーをでっちあげる動機は、この人物には乏しい。それゆえバーンズは真実を語っているのだろうかというのが、大方の見方である。

それならば、なぜ、この時期に告白したのだろうか。それは、ひとつには自らに残された時間が長くないとの意識からだろう。最後に真実を語っておきたいとの気持ちが湧いたのだろう。

そして、より重要には、バーンズの告白の前の月の2月にカーター元大統領の人生がいよいよ最終段階を迎えたとの報道があったからだろう。元大統領は入院先の病院での延命治療を中止し最後の時を迎えるために自宅に戻った。そのカーターに意識があるうちに、1980年の大統領選挙での敗退の影に共和党の陰謀があったという事実を伝えたかったのだろう。

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。